

平成十二年度 春期特別展

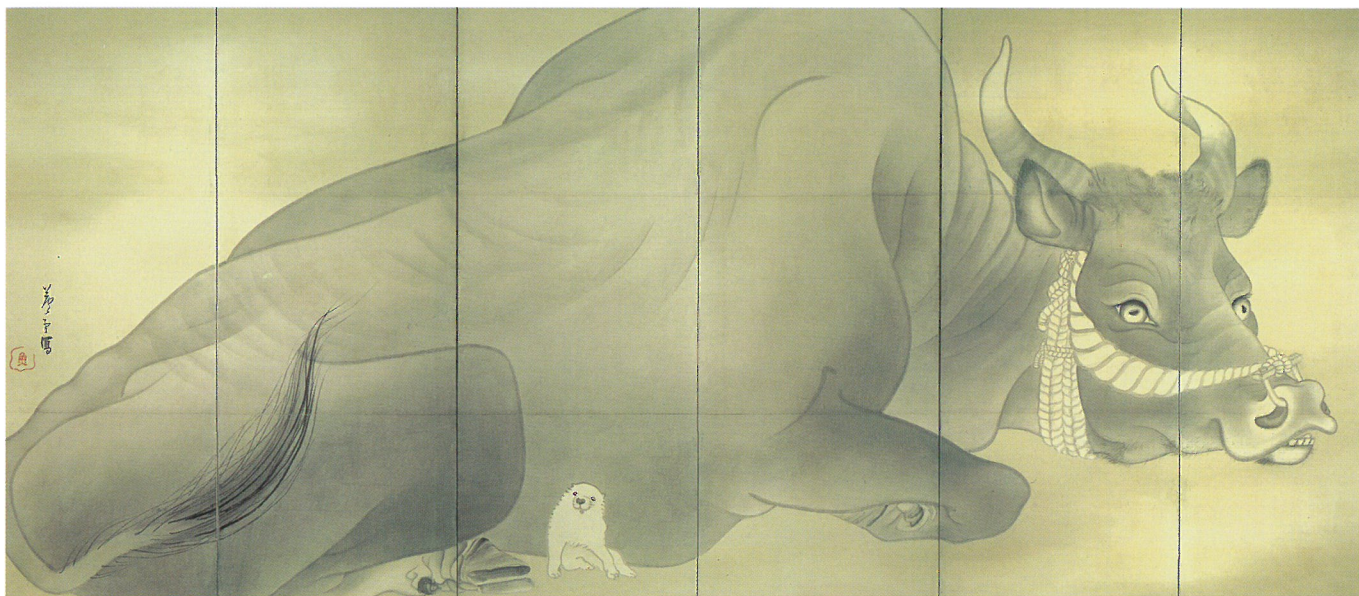
なが さわろ せつ  
長澤蘆雪展

— 没後200年記念 —





## 陽春にふさわしく



日射しも暖かく、木の芽もふくらむ季節となりました。待ち望んでいた桜咲く春の到来です。本年度最初の特別展は、約60年ぶりに実現した長澤蘆雪の大回顧展です。

蘆雪は江戸時代中期に京都で活躍した異色の画家です。前館長辻惟雄先生の名著『奇想の系譜』では「鳥獣悪戯」の名手と評していますが、まことに江戸時代に生まれた“鳥羽僧正”ともいうべき、絵を見る人を楽しませてやまない、サービス心の旺盛な職業画家でした。猫のような虎、人のような猿、合唱団のような鳥の群など、いたずら心をいつも画面に埋め込んで楽しませてくれるのです。今回アメリカから里帰りする「象と牛図」（プライス・コレクション）のように、画面いっぱいに大きく描かれた白い象と黒い牛のにらめっこなど、まさに奇想天外というほかありません。人物を描いても山姥や幽霊など、この世ならぬ人をさもあらんかと表して度肝を抜こうと、楽しげに遊んでいるかのようです。

蘆雪の絵の先生は、写生画の流行をうながした円山応挙という巨匠でした。この世に在る物や事を見たとおりに、また、あるべきように描こうと努めて、それまでの非現実的な日本の絵画を一変させた画家でした。その生まじめといってもよい先生の高弟でありながら、蘆雪はなんと大胆に先生の土俵から遠く飛び出ていっ

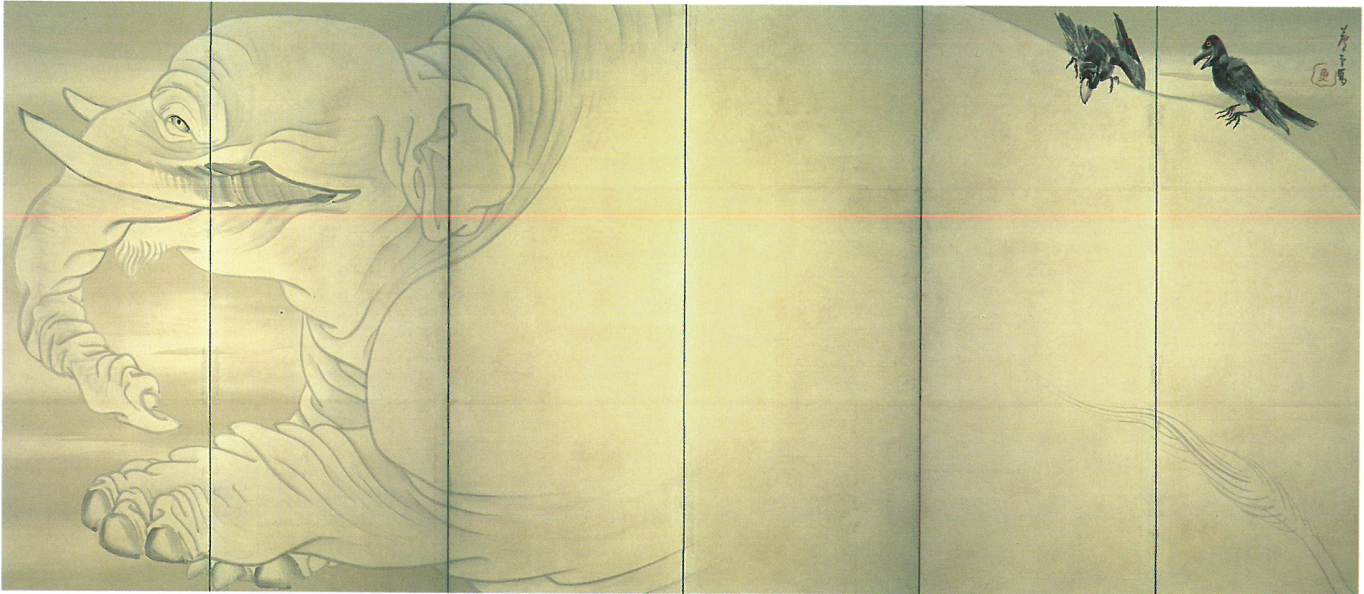
てしまったことでしょう。

良き師は教え子の気質や才能に応じて教え、導くものといえます。応挙も蘆雪にとって有り難い先生であったようで、次のようなエピソードが伝えられています。

冬のある朝、京都近郊の淀に住んでいた蘆雪が市中の応挙の家まで通う途中、とある小川を渡ろうとしたところ一面に氷が張っていました。氷の下には一匹の魚が閉ざされていて、泳ぐこともできず大変苦しそうにしていました。かわいそうに思った蘆雪は助けてやろうとしましたが、氷の下のこととてなすすべもなく、そのまま応挙の画塾へと向かいました。夕方帰り道に例の場所で魚の様子はいかかかを見ると、氷は溶けて魚が自由に泳いでいる様子が見受けられました。翌日、このことを応挙に話したところ、先生が語るには、「大変に良い話だ。私の場合も先生の教えを受けて学ぶこと数年、その間は苦しい修行の連続であったが、やがて次第に氷が溶けるように、いつのまにか自由に絵が描けるようになっていた。ここのところをよく心がけて精進するように」。これを聞いた蘆雪は慢心することなく応挙の教えをよく守り、工夫を加えてついに名人になったということです。

この逸話と関連するように、蘆雪が愛用した印章に「魚」の一





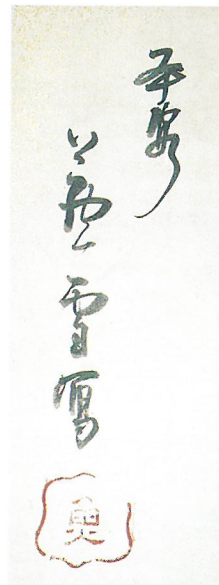
長澤蘆雪「象と牛図（黒白図）」ブライス・コレクション（対向頁共）

字を不規則な形の枠でかこむ大きな印があります（図1）。この印は、数え年の40歳を前後する頃、氷を意味すると思われる外枠の右肩部分を大きく欠損するようになります（図2）。師の応挙の膝元から離れて、今こそ絵を描くことに自由になったと自覚した画家蘆雪の、自負を表明しようとしたのでしょう。実は、蘆雪が使用した印章の多くが今も残っていますが、中年以降に用いた右肩欠損の「魚」印も現存しています。よく比べてみると、若いときに使用した欠損のない「魚」印とは異なるようで、実際には新たにほぼ似た印章をわざわざ再刻したと考えられます。

いまだ氷に閉ざされていた若いときの絵から、氷が溶けて自由を得た後の絵まで、蘆雪の画業のすべてを、陽春の季節に一堂に会して鑑賞することができるのは、なんと時のよろしきを得たことかと、喜ばしく思われてなりません。

4月は、入学や就職、あるいは改めて新しい道へと進路を取ろうとする人も多いことでしょう。それぞれの古い殻を破って生まれかわる勇気を、長澤蘆雪の絵に学んでいただければ幸いです。

千葉市美術館 館長 小林 忠



（図2）



（図1）



## 蘆雪の犬 絵の一つの見方

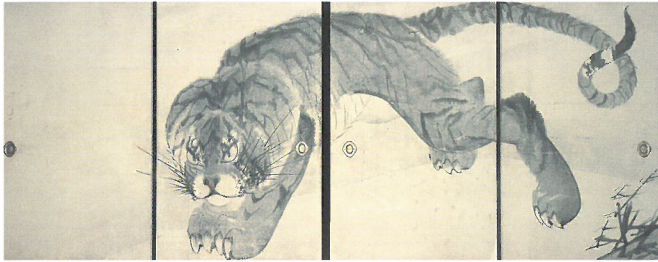


図1 長澤蘆雪『虎図襖』(部分) 無量寺・串本応挙芦雪館蔵 重要文化財

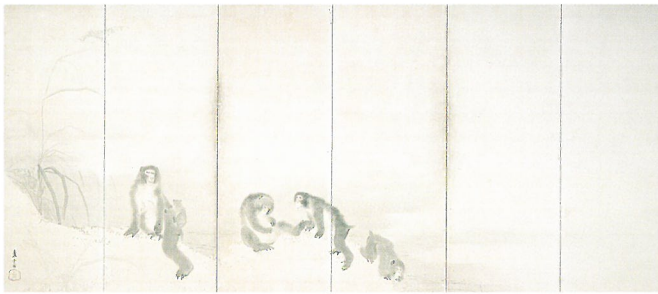


図2 長澤蘆雪『白猿・水辺群猿図屏風』(左隻) 草堂寺蔵 重要文化財



図3 長澤蘆雪・曾道怡『花鳥蟲獸図巻』(部分) 千葉市美術館蔵

「絵の見方がわからないので教えてほしい。」このような要望を頂戴することがときどきあります。絵を見る人にはそれぞれ見たいように絵を見る自由があり、唯一絶対の見方はない、といえぱそれまでですが、以下の記述が「こんな見方もあります。」という例として参考になれば幸いです。

今回の展覧会は長澤蘆雪<sup>ながさわ らせつ</sup>(1754～1799)という江戸時代の画家の作品を集めました。没後200年、彼の作品が残っているのはなぜでしょう？作品に高価な価値があるからでしょうか。安いか高いかの判断は個人差があるとして、現在でも美術市場で流通していますから、金銭的な価値はもちろんあります。しかしその金銭的な価値は、「長澤蘆雪の絵をお金を払って所有したい。」と思わせる絵の魅力を金銭で評価したものです。展覧会の作品の中から一点ももらえたとしたらどれが欲しいかなどと考えてみるのも一つの見方です。

絵の魅力といってもいろいろありますが、蘆雪の作品の魅力は、人の眼を引き付け思わず微笑ませてしまうようなところにあると私は思っています。人生の深遠を感じさせるような作品もあるにはあるし、それもまた蘆雪の一面ではありますが、思わず微笑んでしまうような楽しい作品群に私はより惹かれます。

そんな蘆雪の魅力は動物を描いた作品によく現れています。動物たちは人間のような豊かな表情を持っています。いたずらっ子のような眼をした虎(図1)、思わず知人の顔を思い浮かべてしまう猿(図2)、こちらに何かを訴えかけてくるような正面向きの雀、動物と人間の垣根はずいぶん低いようです。

人の生活と関わりが深い動物といえば犬と猫(最近の住宅事情のために飼いたくても飼えない人のために、犬・猫と遊べる施設まであるとか)。どちらが好きかで「イヌ派」「ネコ派」といったりしますが、作品から判断すると蘆雪はイヌ派のように見うけられます。子犬を描いた作品(図3)が多いのに比べて猫を描いた作品は少なく、子犬は愛らしく描かれるのに対して猫はふてぶてしく小憎らしく描かれています。「愛らしい」は主観的な感想で、200年前の人が蘆雪の描いた子犬を愛らしいと思ったかどうかは定かでないのですが、人間の赤ちゃんも含めて幼い動物は庇護を受けて生存するために戦略的に愛らしいのだと聞きます。子犬と成猫を比べるのはフェアではないようにも思いますが、子犬を題材にした作品は見当たりません。少し後の時代の人ですが、ネコ派で知られる歌川国芳<sup>うたがわくによし</sup>(1797～1861)は猫を可愛く描いていたことを思い出すと、子犬を愛らしく描いた蘆雪はイヌ派と考えたくなります。「犬が好きだから犬の書いてある絵を見る」というのも絵の見方です。

犬に注目して蘆雪の作品を見ていくと、ほとんどどの絵にも後ろ姿の子犬がいることに気づきます。ごろりと横になっていたり、ちょこんと座っていたりですが、首のところが首輪のように白くなっている黒い子犬が後ろ姿でよく登場します。その子犬は蘆雪の愛犬で絵のモデルを努めていたと想像することもできます。首

を傾げて座った後ろ姿や真横から見た走る（歩く）姿は子犬の愛らしさを強調するポーズなのでしょう。最近の子犬の写真集を見てもそのような姿の子犬がとらえられています（絵画の伝統的なポーズが写真にも受け継がれていて、カメラマンがそのようにねらってとるのかもしれませんが）。くにゃっと座る後ろ姿は骨格が定まらない子犬特有のポーズです。蘆雪の師円山広孝（1733～1795）にも子犬らしいポーズを描いた作品はあって、蘆雪はそれを更にパターン化しています。

もし蘆雪がイヌ派で愛犬家だったとしても、子犬という画題を、絵を依頼して代金を支払う人が受け入れない限り、数多くの作品が残ることはありません。画題としての犬は、中国北宋時代の皇帝所蔵品目録である「宣和画譜」に記載があり、中国では毛益という犬の名手が出て、李氏朝鮮では子犬を得意とした李巖がおり、その伝統を受け継いで俵屋宗達も子犬を描くといった、それなりの伝統があります。蘆雪とほぼ同じ時代の伊藤若冲（1716～1800）も群れ集まる子犬を描いた「百犬図」を残しています。この時代、絵の外の社会で、犬はどう見られていたのでしょうか？ ペットとしての犬は江戸時代にもいましたが、小型の狆または大型の鷹狩りに使うような犬（秋田犬のような）が主でした。蘆雪が描いたような中型の日本犬は特定の飼い主がいる犬というより町の犬または野良犬だったようです。小型の狆は犬とは分けて考えられていました（動物尽の絵で「いぬ」とは別に「ちん」があったりする）。「江戸時代にはペットのイヌと食べられるイヌが江戸の町にいたのである」との指摘もあります（註1）。蘆雪よりも少し前の時代、生類憐れみ政策で犬が保護されたのをきっかけに犬を食用とすることはすたれていったようですが、町には野良犬も多く、犬はただ可愛い動物ではなく時には恐ろしい存在でもありました。子犬、ということであれば、犬は多産で安産なため、出産をめぐる習俗に登場することも思い出されます。妊婦の腹帯を戌の日を選んでつける、出産の際に犬の張り子を置くなどです。子犬という画題の絵をどのような人がどのような状況で見たのかを想像するのも、楽しい絵の見方です。犬を好きな人が自室に飾ったり（掛軸の場合）、広げてみたり（巻物の場合）したのでしょうか。干支が戌年の人の持ち物だったのでしょうか。出産を控えた人が見ていたのでしょうか。

子犬は蘆雪の得意な画題の一つでしたが、この時代、お家芸的な得意の画題を持つ画家が続々登場しました。伊藤若冲の鶏、岸駒（1749～1838）の虎、森狙仙（1747～1821）の猿、白井直賢の鼠などです。このような画題の特化は絵を買う人が増え

画家も増えた絵画市場の成熟を示すもので、得意な画題はそれぞれの画家のセールスポイントであると同時に、画家のブランドの確立ともいえます。子犬以外に蘆雪が得意だったと思われる画題は、鮮やかな色彩の孔雀、中国風の美人、唐子（中国風の子供）、水墨で大胆に形をとった山水画などがあります。注文次第では前に描いたのとそっくりな図柄のものを描くこともあったようで、同工異曲の作品が残っていたりします。当時の職業画家は今日私たちの想像する芸術家というよりも職人のような存在であったことを考えると、オリジナルに対する考え方も当然違うはずで、そっくりな作品を複数描くことも不思議ではありません。同じ下絵を使い回すことも特に抵抗はなかったでしょう。弟子に描かせて師の印を押すような工房制作についても、当時の画家は現在の芸術家とは違うということを考えに入れる必要があります。

子犬は母犬と共に描かれることもあります。蘆雪は幼いときに実母に離別し継母に育てられた可能性があるのですが、そのような伝記的事項を知っていれば、母犬と子犬の姿に母子像への執着を読みこむ絵の見方も出てきます。作品の主題と画家の人生を直接重ねあわせるような絵の見方は個人的にはあまり好きではありませんが、絵にまつわる裏話のような物語は時には面白いものですし、嘘か本当かわからないような物語をまわって絵は存在し続けてきたのです。

絵はさまざまな見方で見ることができます。画家に注目し、画家の人生を作品に重ねて見るのも見方です。画題に注目して、同じ画家の別の作品や、別の画家の同じ主題を扱った作品と比べてみることもできます。その主題の意味を歴史的に見たり、文学と照らし合わせたりするのもいいでしょう。制作当時の状況を想像することもできるし、今を生きる自分にとっての価値を考えることもできます。個人的な体験（例えば子供のころ犬を飼っていたときのことなど）と比べることもできますし、絵を見ることによって記憶が蘇ったりすることもあるでしょう。ただ一つの正しい見方があるのではなく、いろんな見方ができるからこそ絵は面白いのだと私は考えています。

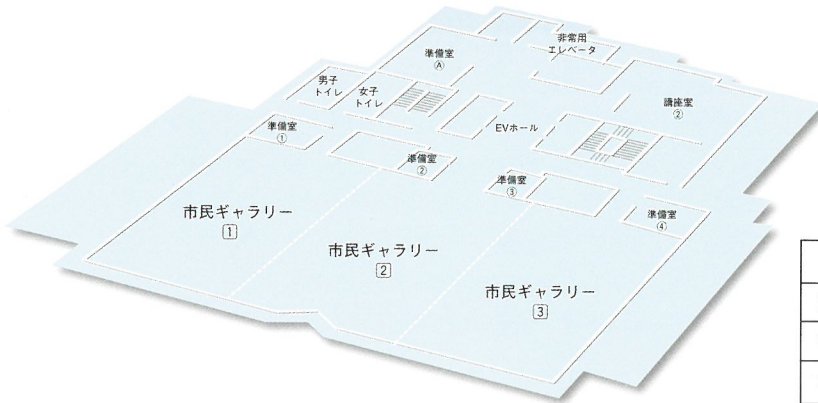
註1 西本豊弘「イヌとネコとサル」

『動物とのつきあい—食用から愛玩まで—』国立歴史民俗博物館 1996



## 市民ギャラリーご利用の案内

9階の市民ギャラリーは、市内で活動する美術団体の方々に作品を発表していただくスペースです。



展示室	床面積	壁面延長	壁面高
市民ギャラリー①	162.0m <sup>2</sup>	49.0m	3.0m
市民ギャラリー②	136.7m <sup>2</sup>	37.6m	3.0m
市民ギャラリー③	162.0m <sup>2</sup>	49.0m	3.0m

市民ギャラリーは①・②・③の三室に分かれ、それぞれが絵画をはじめとして、彫刻や工芸、写真など多様な展示に対応しています。

また、三室を合わせ、ひとつの大きな空間として利用することが出来ます。

6月30日(金)まで、2000年10月～2001年3月までの利用を受け付けます。

【利用時間】 10:00～18:00 (金曜日のみ 20:00まで)

【休館日】 月曜日及び年末年始

※ご利用の際の手続きなど、詳しくは美術館までお問い合わせください。

## 「友の会」入会のご案内

千葉市美術館は開館以来、より身近な美術館づくりを目指しております。

千葉市美術館「友の会」は、美術を愛する人々にさらに親しまれる美術館づくりを進めるために誕生しました。

皆様のご入会をお待ちしております。

### 【会員の特典は】

#### ■無料サービス

千葉市及び助千葉市美術振興財団が主催する企画展や常設展が無料で何回も観覧できます。

#### ■割引サービス

千葉市及び助千葉市美術振興財団が主催する展覧会図録が割引(販売価格の10%引き)で購入できます。

千葉市および助千葉市美術振興財団が主催する企画展や常設展の観覧料が同伴者も割引(3名まで団体料金)になります。

#### ■情報サービス

千葉市及び助千葉市美術振興財団が主催する講演会等の美術館情報をお届けします。

### 【会員の資格は】

- 会員期間は、入会日から1年間です(美術館パスポートの発行を持って、会費納入の領収書とさせていただきます。)
- 学生会員の方は、学生証をご提示(コピーも可)ください。
- 途中で退会されても、会費の払い戻しはいたしません。

- パスポート紛失等により再発行を受ける場合は、手数料が必要となります。

### 【会費の額は】

#### ■入会金

- 一般会員 ..... 1,000円
- 学生会員(高・専・大) ..... 500円
- ファミリー会員(大人2名と中学生以下の家族) ..... 2,000円

#### ■年会費

- 一般会員 ..... 年3,000円
- 学生会員(高・専・大) ..... 年1,500円
- ファミリー会員(大人2名と中学生以下の家族) ..... 年6,000円

### 【入会の申込み方法は】

- 美術館8階の入館者受付に備えてある「入会申込書」を利用し、お申込みください。
- 休館日(臨時含む)や年末年始は、お申込みできません。
- 詳細は、千葉市美術館 TEL: 043-221-2311までお問い合わせください。

# 展覧会スケジュール

【休館日】月曜日（祝日の場合はその翌日）年末年始 展示替期間中

【開館時間】午前10時～午後6時（入場は午後5時30分まで）毎週金曜日は午後8時まで（入場は午後7時30分まで）

【ハローダイヤル】043-227-8600

※展覧会の日程・名称は変更される場合があります。なお、企画展の入場料は展覧会ごとに異なります。詳しくは美術館までお問い合わせください。



## ◆長澤蘆雪展 — 没後 200 年記念 —

4月4日(火)～5月7日(日)

前期：4月4日(火)～4月16日(日)

後期：4月19日(水)～5月7日(日)

江戸時代中ごろの京都では、新旧の画派が入り乱れて多くの画家が活躍し、百花繚乱というべき賑わいを見せていました。そんな中、機知に富んだ描写でひととき大輪の花を咲かせたのが長澤蘆雪（宝暦4・1754～寛政11・1799）です。本展は、伊藤若冲・曾我蕭白と並んで奇想の画家の一人に数えられる蘆雪の生涯にわたる画業を振り返り、紹介するものです。

蘆雪は、師・円山応挙ゆずりの優れた描写技術を基礎に、形式にとらわれない想像力あふれる西風の作品を残しました。自ら赴いて筆をとった南紀（現在の和歌山県南部）には襖絵を中心に今も多くの作品が伝わっています。中国風の美女を描いた美人画、子犬の愛らしさを引き出した動物画、夢幻的な山水風景画、大胆な構成で大画面の特性を十分に生かした襖絵など、見所満載です。

本展は、南紀に残る代表的大作、新出の作品の他、在米のプライス・コレクションからの里帰り作品を含む約100点により構成されています。全国では、60年ぶり、関東地方においては初めての網羅的な回顧展となります。

長澤蘆雪『西王母図』

## ◆高松次郎 — 1970年代の立体を中心に

5月16日(火)～7月16日(日)

高松次郎（1936～98）は日本の現代美術における重要な作家のひとりです。

これまで、高松の作品について国・公立美術館が開催した個展では、1960年代の「影」や「遠近法」のシリーズ、あるいは80年代以降の絵画を中心に紹介が行われていました。今回は、これまであまり顧みられることの少なかった70年代の立体作品である「複合体」シリーズを中心に、関連作品など約50点によって展覧会を構成します。

「複合体」シリーズは高松の他の作品群とは異なり、制作を重ねる過程で作品を支える概念にたびたび問題が起り、作者はその問題の解決のために1970年代全般にわたって同シリーズと向き合うことになりました。それは、60年代後半からわが国の美術状況のなかで模索されはじめていた新たな立体表現に対して、高松がどのようにアプローチしようとしていたのかを伝えるものとなっています。

本展は、高松次郎という作家のあゆみについて考えるとともに、1970年代以降のわが国における空間造形を検証するものです。



高松次郎『複合体』椅子・煉瓦 1972年





跡見 泰『蛸壺』1951 油彩・カンヴァス 86.0×109.9cm

跡見泰（1884 - 1927）は東京生まれ、東京美術学校西洋画科専科に学びました。在学中は黒田清輝（1866 - 1924）に師事しています。黒田は、わが国に油彩画を根付かせた功労者のひとりであり、明治後半の画壇に新風を吹き込んだ美術団体・白馬会を主宰していました。美術学校卒業後の跡見もこの会に参加して、その後の画家としての活動の場を得ることになります。1912年、同会が解散すると会員だった中沢弘光

（1874 - 1964）や三宅克己（1874 - 1954）たちが新たに光風会を結成しますが、跡見はその創設から参加しています。白馬会、そして光風会は黒田がパリから持ち帰った新しい表現様式に支えられていました。それは、フランスのアカデミーの厳格な表現と印象派の折衷です。

『蛸壺』は、黒田の教えがどんなものであったかをよく示しています。画面全体は大まかな筆でざっと描かれて温雅なものになっていますが、人体をよく見ると骨格や筋肉の動き、バランスには注意が払われていることが判ります。「デッサンの修練と、ほどほどの主観。絵は、対象をしっかりと把握する描写力に裏打ちされないといけない。それができないうちに、勝手に自分の思うように描いたって評価はできない」、これが、黒田の考えでした。

もっとも、黒田が日本に移植した表現には重大な問題がありました。黒田が学んだ表現ではフランスの風土は描くことができたとしても、日本の湿潤な風土をとらえることは困難だったのです。そのため、画家たちは陽光を求めようになりました。東京の近くだったら伊豆半島や外房、京都・大坂の近くは南紀のあたり。いずれも、黒潮による温暖な気候と陽光に恵まれ、発達した鉄道などによって都市から出かけることが便利な土地です。

跡見のこの作品は外房・鶴原を描いたものです。この作品が、題名となっている蛸壺や漁師たちの姿が主題ではないことはわかりでしょう。画家の目は、その背後の青い空の下に広がる風景に主な関心が向けられています。手前のひとつひとつが描かれていなければ、南仏のどこか、と言っても通用するかも知れません。画家が学んだ絵画表現と題材がうまく適合した一例です。

加えて、制作された1951年という時代もいい。戦後の混乱もようやく落ち着き、開発の狂気が国土を覆うにはまだ余裕があったころでしたから。

本館学芸員 藁科英也

美術館のご利用あんない

NTT ハローダイヤル 043-227-8600

1-2階 SAYA-DO HALL  
さや堂ホール

昭和初期に建設された、市内に残る数少ない貴重な建物（ネオ・ルネサンス様式）を新しい建物で包み込み、復元・保存したものです。

1階 MUSEUM SHOP  
ミュージアム・ショップ

展覧会カタログ・美術図書、ミュージアムグッズがお求めになれます。

7階 AV CORNER  
映像コーナー

ハイビジョンによる作品鑑賞、所蔵作品の検索ができます。また、千葉市美術館制作の番組をご覧頂けます。

10階 ART LIBRARY  
図書室

室内の美術図書はご自由にご覧になれます。また、美術書の検索に関するご相談をうけたまわります。

[開室時間] 10:00~18:00

11階 RESTAURANT  
レストラン

ランチタイム・喫茶にご利用下さい。

[営業時間] 11:00~21:00

- JR 総武線千葉駅
  - 東口より徒歩約15分
  - 京成バス大学病院行（のりば⑦）「大和橋」下車徒歩約2分
  - 京成バス矢作台市営住宅・川戸行（のりば⑦）あるいは小湊バス八幡宿駅行（のりば④）「広小路」下車徒歩約1分
  - 千葉都市モノレール県庁前行（「葭川公園」下車徒歩約5分）
  - 無料巡回シャトルバス「チーバス」（のりば⑩）「中央区役所・美術館前」下車（11:05~18:35の毎時05分と35分に出発・水曜運休）
- 京成千葉中央駅東口より徒歩約10分

